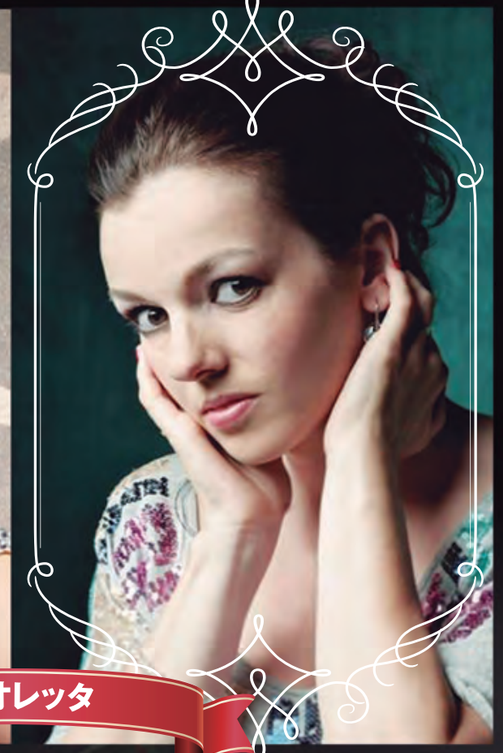
《椿姫》～世界でもっとも愛されるオペラの魅力

［音楽評論家］加藤浩子

《椿姫》は世界でもっとも上演されているオペラである（Operabase調べ）。なぜ《椿姫》は愛されるのだろう。
泣ける物語と美しい音楽がある、というだけではない。ヴェルディの音楽は、悲劇のヒロインにどこまでも寄り添い、現代日本の私たちにも共感を呼び起こすのだ。
冒頭の一音から、愛のためにすべてを犠牲にした薄幸のヒロインのため息が伝わってくる。ヴェルディは、歌手の歌合戦状態だったイタリア・オペラを、物語と音楽がひとつになった「オペラドラマ」へと変えた作曲家だが、《椿姫》はまさに彼の理想が実現した傑作なのである。
だからこそ、世界中で愛されつづけているのだろう。

オーケストラ、合唱から衣装、舞台も現地公演そのままに、総勢170名による「引越し公演」！本国でも人気の高いフランス人演出家アルノー・ベルナールの演出による、白と黒のイメージを基調とした美しい舞台！



ヴィオレッタ

エヴァ・ホルニィアーコヴァー
Eva Hornyáková

スロヴァキア国立歌劇場に2006年にデビュー。ドレスデンの国際声楽コンクール「コンペティツィオーネ・デ・オペラ」(Competizione dell' Opera)と「マリア・カラス国際声楽コンクール」ファイナリスト。得意な役柄はラ・ボエームのミミ（スペイン・コロナ劇場、スロヴァキア国立歌劇場来日公演）。近年、コンサートでは、ハイコ・マティアス・フェルスター指揮のもと、マーラーの「復活」を歌った。

ヤナ・シベラ *Jana Sibera*

プラハ音楽芸術アカデミーを卒業。2002年にイタリアのメランで行われた国際声楽コンクールで、初出場ファイナリストとして注目を浴びる。同年よりプラハ国立歌劇場ソリスト。《コジ・ファン・トゥッテ》デスピーナ、《ドン・ジョヴァンニ》ツェルリーナ、《フィガロの結婚》バルバリーナ、《カルメン》フラスキータなどを歌って、本劇場のほかプラハ国民劇場や国内各地の劇場につぎつぎ登場している。

指揮：マルティン・レギヌス

演出：アルノー・ベルナール

アルフレード

アレシュ・ブリスツェイン　ルチアーノ・マストロ

ジェルモン

スヴァトプルグ・セム　ミケランジェロ・カヴァルカンティ

フローラ

ミカエラ・カプストヴァー　シルヴァ・チムクロヴァー

ガストン

マルティン・シュレイマ　ヤン・オンドラーチェク

ドゥフォール男爵

フランチェク・ザフラドニーチェク　ロマン・ヴォツェル

ドビニー

イヴォ・フラホヴェツ　フランチェク・ザフラドニーチェク

グランヴィル

オレグ・コロトコフ　ロマン・ヴォツェル

＊一部キャストが変更となる場合があります。正式なキャストは公演当日の発表となります。

あらすじ　パリ社交界の華と純情な青年の儚い愛の行方は…。

第1幕

舞台は19世紀半ばのパリ。華やかな宴を催す社交界の華ヴィオレッタの館にやって来たのは彼女に恋心を抱く富豪の息子アルフレード。杯を上げ「乾杯の歌」を歌って場を盛り上げます。アルフレードは、彼女に自らの思いを告白しますが、ヴィオレッタは、自分は恋とは無縁と、年下の純情な青年を相手にしません。しかし、アルフレードの純粋な愛に心動かされ、とまどうヴィオレッタは、自らの気持ちを自問自答し「ああそは彼の人か」「花から花へ」を歌います。

第2幕

やがてヴィオレッタは社交界を離れ、パリ郊外の家でアルフレードと二人で暮らし始めます。ある日、アルフレードの留守中に、彼の父ジェルモンが訪ねて来て、娘の縁談の差し障りとなるので、息子と別れてほしいと彼女に迫ります。ヴィオレッタは、悲しみの中で別れを決意し家を出て行きます。別れの手紙を読み、彼女が裏切ったと思い激怒するアルフレード。父親は故郷「プロヴァンスの海と陸」を歌い、息子を慰めようとしますが、聞き入れません。その夜、ヴィオレッタはパリの社交界に戻り、かつてパトロンだったドゥフォール男爵に手を引かれて現れます。彼女を追ってきたアルフレードは、ヴィオレッタが男爵を愛していると苦しまぎれに言うのを聞いて逆上します。彼は社交界の大勢の人前で彼女をひどく侮辱して悲しませるのでした。

第3幕

パリのヴィオレッタの家。重い病におかされ、ベッドで横になっている彼女は、自分の最期が近づいていることを知り、戻らない愛の日々を回想して「さようなら過ぎ去った日よ」を歌います。そして、死を目前にしたヴィオレッタの前に、全ての事情を父から聞いたアルフレードが駆け込んできて許しを請います。再会を喜ぶ二人は熱く抱擁し二重唱「パリを離れて」を歌い、そこへ父ジェルモンもやって来て二人は互いの愛を確かめ合います。しかし、時すでに遅く、アルフレードの腕に抱きかかえられながら最後の力をふり絞って立ち上がった彼女は、不思議な穏やかさに包まれながら息絶えたのでした。